

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號二·一第 卷八十五第

高田博士還曆記念論文集

行發月二年九十和昭

コンツェルンの類型について

静田均

わたくしは他の機會にコンツェルンの標識の一つとして、傘下の諸企業が法律上の獨立性を保つことを指摘し、かく解するのは通説を採用するにすぎないが、他方、著名な學者の反對論も存することに言及した¹⁾。反對論の代表としてはベツケラートがあり、また近くはベルケンコップも彼に追隨して同様の見解を吐露してゐる。ベルケンコップによると、コンツェルンを構成する諸企業は法律上の獨立性を保つのが普通であるけれども、中には以前の子會社を統合して法律上一箇の會社となつたものもある。そこでもし法律上獨立の諸會社よりなるコンツェルンと法律上單一の會社よりなるコンツェルンとの區別をしようと思ふなら、おそらく『分肢コンツェルン』(Gliederkonzern)と『統一コンツェルン』(Einheitskonzern)に分けることができるであらう、といふのである。しかもこの主張は一九三七年一月、ナチスの治下において株式會社法が改正せられ、コンツェルンに關する成文法の規定が公けにされた後のことに屬するといふ意味で、ひとしほわれわれの注意を要請してやまない。彼はいふ、『新ドイツ法律は「コンツェルン」の概念をこの分肢コンツェルンに限定してゐる。すなはち新株式法は獨立せる諸事業(コンツェルン事業)が經濟的目的のために統一的管理下に包括された構造をコンツェルンと稱してゐる。しかしコンツェルンの經濟政策にとつても、その價值判斷にとつても、大統一企業(Grosse Einheitsunternehmung)または

コンツェルンの類型について

九五

1) 拙稿『コンツェルンに關する覺え書』(經濟論叢、昭和十八年十月號)。

前述の「統一コンツェルン」における問題は、多くの點で整頓された諸會社が法律上獨立を保つところの「分肢コンツェルン」におけると同様である』云々。

フデオーンと緊密な形態のコンツェルンとの間に實質上ほとんど重要な相違の存しないことは、ベツケラートやベルケンコップのいふとほりであつて、それ自體としては首肯しえられぬことではない。事實多くの學者の一樣に認めるところでさへある。しかしさうかといつて、フデオーンをコンツェルンの一種と見做すことは妥當ではあるまい。それとこれとはおのづから別箇の問題でなければならぬ。コンツェルンの重要な特徴の一つは、あくまでそれが多数の企業によつて構成され、これらの諸企業が相互に獨立性を保有してゐるところにある。さうしてまさにこの點において、單一の企業にまで融合したフデオーンと相違するのである。これを識別することは必要であるし、また重要であるとおもふ。従つてわたくしはベツケラートやベルケンコップの所説をそのまま承服することはできないが、しばらく一步をゆづつてこれを異論として認めるとすれば、コンツェルンは單一企業の形態をとるものと多数企業の形態をとるものとに區別することができるわけであり、ベルケンコップのいふが如く統一コンツェルンと分肢コンツェルンの二類型を抽出することも可能となるであらう。こゝではほんの参考として一言を費すにとどめる。

二

コンツェルンの特徴は、それが一方において包括的な全體と觀念されると共に、他方においてこの全體を構成する個々の部分がそれ自身一つの單位をなし、多かれ少かれある程度の獨立性を保有すると同時に、それに相應した独自の生活を営む點にある。コンツェルンを構成する個々の企業は、だからある程度の從屬性とまたある程

度の獨立性と二つながら同時に併有するのであつて、この獨立性と從屬性の程度如何は個々のコンツェルンによつて異り、いはば無限のニエアンスがありうるわけだ、緊密な構造のコンツェルンにあつては企業の從屬性がより強く、ルーズな構造のコンツェルンにあつては企業の獨立性がより強いであらう。

コンツェルンの主要標識としてしばしばあげられるのは『統一的指導』(einheitliche Leitung)といふ概念である。統一的指導といふ概念の具體的内容を如何に理解するかは學者によつて異り、これを極めて嚴格に解するものもあるし、また極めてルーズに解するものもある。その結果、緊密な結合のもののみをコンツェルンと見るか、ルーズな結合のものをもコンツェルンと見るか、説はあつたから二つに岐れざるをえない。が、いづれにせよ、いふところの統一的指導なるものは、生産技術・賣買・金融・管理の各方面にわたつて行はれうる。なかにづく金融・管理におけるそれが重要な意義をもつ。さうしてこの統一的指導を可能ならしめる根據は、コンツェルンとして體現される企業の結合それ自體であり、さうして結合の方法は資本的・契約的・人的の三つをあげること、かつて指摘したところである。これら三つの方法は現實にはしばしば併用され、互ひに相補足し合ふこともすでに論及した。

ところでコンツェルンを形成する諸企業は、それぞれ同格のもの、對等のものとして、併列的に相互依存の關係において關聯づけられる場合もあるし、また上位のものとして、支配・被支配の從屬的關係において關聯づけられる場合もある。前の場合は資本連鎖(Kapitalverflechtung)、相互證券保有(mutual security holding)、輪狀の資本交換(Tringmässiger Kapitalumtausch)、インテレッセンゲマインシャフト等において見られるところであるが、より重要なものはむしろ後の場合である。

コンツェルン形成の方法として、最も根源的なもの、基本的なものが參與であることはあらためていふまでもないが、一般に參與の主體たる企業を親會社 (Mutterschaft) とよび、參與の客體たる企業を子會社 (Tochtergesellschaft) とよぶ。兩者の關係は要するに從屬關係にほかならない。そしてその程度は所有株式の多寡に應じて種々様々である。ドイツの學者は五〇パーセント以上の參與を多數參與 (Mehrheitsbeteiligung)、二五パーセント以下を少數參與 (Minderheitsbeteiligung)、その中間のものを制限的少數參與 (qualifizierte Minderheitsbeteiligung) となづけてゐる。わが國において直系會社、傍系會社、關係會社等と稱せられるものゝ區別の線は必ずしも明確でないが、だいたい右とほぼ同様の意味において親會社と子會社との關係の親疎・濃淡を現すものといへよう。しかし、われわれは單なる資本的關係よりする唯物的見地のみに踞踏することなく、あはせて人的關係をも視野の中に取り入れなければならぬ。

子會社はさらにその下に自分自身の子會社をもつことができる。この場合、後者は最初の親會社から見れば孫會社 (Enkelgesellschaft) に該當するわけであり、最初の親會社との間に子會社を媒介とする間接支配の關係が成立する。支配關係はそれだけ薄弱となるにしても、この種の關係は無限に成立しうる。かうしていくつかの階層を形づくりつゝ、膨大な企業複合體 (Unternehmenskomplex) が成立するわけだが、このやうな場合こそ、まさにコンツェルンとして人々を眩惑するのである。それは前の場合におけるコンツェルンの如く、同じ地平線に併列する諸企業の集團ではなくて、むしろ最初の親會社を頂點として形づくられたピラミット型の構造を呈現する。いひかへると、コンツェルン傘下の個々の企業は直接的または間接的な從屬關係に立つと同時に、ピラミットの頂點に立つ中核企業 (Kernunternehmung) はいはば司命塔の如き役割を果す。かやうな見地よりするとき、われわれ

は多くの學者と共に、併列的コンツェルン (Konzern der koordinierter Unternehmung) と従屬的コンツェルン (Konzern der subordinierter Unternehmung) の二つの類型を指摘することができらるであらう。

III

ドイツの學者たちはしばしばコンツェルンを、企業結合の推進的契機によつて人的コンツェルン (Personalkonzern)、物的コンツェルン (Realkonzern oder Sachkonzern)、金融コンツェルン (Finanzkonzern) の三つに分つてゐる。²⁾こゝに人的コンツェルンと稱するものは、爾餘の要因を別としても、優に人的な要因によつて支配されるところのコンツェルンのことにほかならない。換言すれば、人的な影響力にもとづいて縦横に切つて廻すやうな人物の存在を前提としてそれは成立する。従つてかうした中心人物の退場によつて、そのコンツェルンが土崩瓦解に歸するといふことも容易に考へられるわけだ。この種のコンツェルンはドイツと限らず、どこの國でも見出されるであらうが、假にわが國に求めるとしたら、さしづめ一昔前の根津財閥や大川財閥をあげることができらるであらう。これらの財閥の創始者は稀れに見る辣腕と蓄財心と事業慾の持ち主であつて、あらゆる産業部門に觸手のばし、多數の會社の重役ないし大株主として有力な發言をなしてゐたのであるが、その没後は期年ならずして分裂してしまつた。

いづれにせよ、この種の人的コンツェルンはあまり重要性をもたない。經濟上重要な意味を有するのは、むしろ物的コンツェルンおよび金融コンツェルンである。物的コンツェルンと概稱されるものは人的コンツェルンとまさに反對に、企業の純然たる物的な (sachlich) 結集を意味する。物的コンツェルンを構成する個々の企業は、同じ種類もしくは類似の種類のある企業である。詳言すれば、同一の産業または隣接の諸産業部門における諸企業を

2) H. Brökelmann, Beiträge zum Verwaltungs- und Rechnungswesen des Konzerns. 1939, S. 6.

連結したものであるから、生産の點において多かれ少かれ一定の關聯を有するわけである。こゝでは生産行程の分離統合、原料資材の獲得、製品の販賣等における合理化といふことが最大の關心であり、コンツェルン形成の主たる動因となつてゐる。ドイツの學者が『有機的コンツェルン』(organischer Konzern)と呼んでゐるものは、だいたいこの種の物的コンツェルンを指稱すると解してよいであらう。

金融コンツェルンと稱せられるものは、主として金融力にもとづいて成立するコンツェルンの謂ひである。従つてこゝでは企業が如何なる産業部門に屬するかは何ら重要な問題とならない。むしろ過大な資本を擁する者がその投資口を求めてありとあらゆる部門に投資しようとするのであるから、危険分散の觀點から適宜選擇が行はれると同時に、また投機的な性質をおびる場合もないではない。合理化の要求から出たのではなく、過剰資本の投下先を求めるのが動因である以上、この種のコンツェルンによつて齎らされる企業結合はルーズであり、多方面にわたる點において往々いはゆる『百貨店式コンツェルン』を現出する。それはしばしば『非有機的コンツェルン』(inorganischer Konzern)とも呼ばれてゐる。³⁾

第一次大戦後のドイツは、旋風の如く捲き起つたコンツェルンの嵐に一時は茫然自失のかたちであつたが、やがてひとはその中から物的コンツェルンと金融コンツェルンの二つの類型を見出した。すなはち一方においてはヴェルサイユ條約の結果、國土の一部を喪失し、なかんづく著名なエルザス・ロートリンゲンの如き重工業地帯を切断されたのみならず、賠償金負擔の重壓と列國の關稅引上げと闘つていやでも輸出の増大を圖らねばならなかつた時局の急迫は、徹底的な合理化の敢行を業界に強要したのであつて、それはとりもなほさず有機的な物的コンツェルンの形成を促進する動因として作用した。

3) Emil van den Boom, Industrie und deutsche Wirtschaftspolitik. 1927, S. 65 ff.

他方において、戦争の齎らした損害に對する政府の補償金の交付、インフレーションによる富の偏倚と換物人
氣の横行、怖るべき社會化に對する忌避等は、株式投資を通してコンツェルンの結成に拍車をかけた。なかんづ
く資本的に過大の餘裕をもつた商業資本家の活躍がひときわ目立つてゐたことは特筆に値ひしよう。かやうにし
て非有機的な金融コンツェルンはいたるところに發生し、行き過ぎてたうとう破綻を暴露したのも少くなかつ
た。有名なステンネス・コンツェルン (Stinnes Konzern) の崩壊はその一例にほかならない。

四

物的コンツェルンと金融コンツェルンの區別は、ドイツでは多くの學者が好んで用ひるところである。⁴⁾しか
し、これに關してはなほ若干吟味すべき異論の存することを指摘しなければならぬ。

リーフマンのいふところによると、ドイツにおけるコンツェルンの發生は第一次大戰後の新しい現象ではな
く、第一次大戰以前すでにこゝかしくに見られた。すなはちコンツェルンの先驅はまづ銀行業および鑛業に出現
し、ついで電機工業等にも若干成立してゐた。それは第一次大戰の終結以後いろいろな要因の作用によつて顯著
なる發展をとげたにすぎない。ところで戦前のコンツェルンと戦後のコンツェルンとを比較して特に注意すべき
相違は、戦前において生産經濟の見地が重心を形づくつてゐたのに、戦後においては資本經濟的な觀點が前面に
押し出されてきた、といふことである。一言にして蔽へば、コンツェルン運動の大勢は物的コンツェルンの形成
より金融コンツェルンの形成に向つて推移したといふ結論に歸着するわけである。

しかるにこれに反してベルケンコップはいふ。狭義におけるコンツェルンは、内的有機的に構成された複合
體、從つて強い独自の生命をもつ、閉鎖的完結的な複合體となつてゐるものゝみを稱しうる。特に工業經濟の領

4) W. Schuster, Konzerne (Handwörterbuch der Betriebswirtschaft. Band. 2, 1939, S. 665—666.
5) R. Liefmann, Kartelle, Konzerne und Trusts, 1930, S.

域に適用すると、その生産構成および生産綱領において相互に調和してゐるやうな形のものゝみを固有のコンツェルンと名づけるといふ意味になる。この意味において、かのインフレーション時代に簇生したいはゆる『コンツェルン』の多くは、嚴密な意味のコンツェルンといふことはできない。——それらはその後間もなく、しばしば偶然の結果、取引所の状態もしくはその創設者の『辣腕』の結果であつた非有機的な組成のために散烈してしまつた。

生産經濟的にその個々の部分で相互に調和して居り、従つて生きた統一體を形成してゐる眞正の工業コンツェルンと相並んで、金融資本によつて大工業複合體支配の目的で作られるところの、多くは國際的に結合せる金融コンツェルンがある。それは特に國際的に強く絡み合つた工業部門（化學、電機工業、冶金業）において一役を演じてゐる。かゝる場合、設立のイニシアティヴが國際的な金融會社を通じて資本調達と輸出とを容易ならしめるため、工業の側から出る場合もあることはもちろんである。

しかし、とベルケンコップは語を強める。『固有の金融コンツェルンは現在ドイツには存しない。ドイツの工業コンツェルンは全體として、まづ生産經濟的な觀點にその發生を負ふてゐる。そしてその重心はつねに生産の統一化と低廉化におかれてゐる眞のコンツェルンである。金融コンツェルン（この判断はかなりむづかしく、事態に應じて異る）は従つてドイツにおいては、だいたいにおいて經濟政策的考察の圏外に退いてゐる』と。

さてベルケンコップのいふところをあらためて簡単に要約すれば、一般論としては物的コンツェルンと金融コンツェルンの二類型を認めうるけれども、ドイツに關する限り、現在のところ金融コンツェルンは取り立てゝ問題とするほどのことはなく、物的コンツェルンのみが問題となりうるといふにあるものゝ如くである。試みにこ

れをリーフマンの所説と對照せしめよ。ひとは兩者は明かに喰ひ違つて居り、對立してゐることを發見するであらう。いつたいどつちが正しく、どつちが誤つてゐるのか。問題をかく提起するかぎり、何人も取捨の判斷に迷はざるをえないであらう。この謎は如何に解かるべきであるか。

私見によれば、この對立はそれぞれ事態の眞理性の一面を道破したものと解したい。つまり金融コンツェルンのあるものは、多分に不純な射倖的な動機に驅られたものであり、とりわけかのインフレーション期において彗星の如くに出現し、泡沫の如くに瓦解した。かうした不健全な弱體コンツェルンは一時的な繁榮にも拘らず、おのづから短命であつて、悲劇的な破局をもつて終りを告げたことは何ら怪しむに足りない。前記スチンネス・コンツェルンの崩壊の如き、まさしくこの證左であつて、現にソンバルトもこの種のものは『蜂蟻のやうな構成體』(ephemere (Fehltie)) にすぎないから、眞正のコンツェルンといふべきではなく、一種の『寄せ集め』(Sammlung)といふべきであると斷じてゐる。⁶⁾

なるほど金融コンツェルンのあるものは不健全であり、國民經濟の土壤に確乎たる根をおろさないといふ意味では一顧にも値しないといつてよいかもしれぬ。しかし不健全といふことゝ非有機的といふことは必ずしも同義異語ではない。生産行程および流通行程を通じて緊密な牽連關係を有しないといふ意味ではたしかに非有機的であらうが、この非有機的な金融コンツェルンの中にも、投下資本の危険分散と限界収益の均等化を追求する限り、合理性を失はずに堅實な生活を營むものも嚴然として存在する。ドイツにおいていへば紡績業を久しく牙城としてゐたブルーメンシュタイン・コンツェルン (Blumenstein-Konzern) の如く、他の産業部門へ積極的に進出したものも存在するし、またヒアーク・コンツェルン (Vierg-Konzern) の如く、純粹持株會社によつて異種産業部門

6) W. Sombart, Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus. 2. Halbband. 1927, S. 829.

の諸企業を統括してゐる事例も見られるのである。果して然りとすれば、ベルケンコップの所説におけると同じくリーフマンの所説にも一面の眞理性を認めることができるであらう。否、いはゆる『合理化コンツェルン』(Rationalisierungskonzern)または生産コンツェルン(Produktionskonzern)のみをもつて眞實のドイツ型コンツェルンとなさんとする主張はやゝ極端に失する、とわたくしは考へるものである。金融コンツェルンはドイツよりアメリカにおいてつとに大きな地盤をもつた。が、さうだからといつて金融コンツェルンはアメリカ型のコンツェルンであり、反對に物的コンツェルンはドイツ型のコンツェルンであると結論づけるのも、いさゝか誇張にすぎないであらうか。

こゝで一言つけ加へておきたいのは、わが國においてしばしば提唱されるところの産業資本型コンツェルンおよび金融資本型コンツェルンの概念である。⁷⁾それは必ずしも定説として一義的に解釋しがたいけれども、しばらくコンツェルン形成の主體たる中核企業の性格と企業結合の意圖する目的とによる區別と解する主張をばドイツ流の物的コンツェルンおよび金融コンツェルンの概念と對置するとすれば、兩者は必ずしも相符合するものではないことを注意しなければならぬ。すなはちいふところの産業資本型コンツェルンは何よりもまづ主體たる中核企業が親事業會社(Parent operating company)であり、金融資本型コンツェルンのそれは純粹持株會社(pure holding company)であることを要件とするに反し、物的コンツェルンおよび金融コンツェルンの概念は、コンツェルンを形成する諸企業が生産行程および流通行程を通じて緊密な相互牽連關係を有するか否か、換言すれば經營の合理化を目的とするか、投下資本の危険分散もしくは限界収益の均等化を目的とするか否か等によつて、全體としてのコンツェルンの性格を判斷しようとするものだからである。兩者は表現の外形において相類するとはいへ、意

7) 高宮 賢『企業集中論』(昭和十七年) 四四—頁以下。

義内容においてはかなり相違することを知らなければならぬ。

さて議論を本筋に引き戻すとしよう。物的コンツェルンであると金融コンツェルンであるとを問はず、それがわれわれにとつて特に重要な意義を有するのは、経済的合理性を追求する限りにおいてでなければならぬ。さうしてこの見地よりすれば、物的コンツェルンの方が金融コンツェルンより一層すぐれた長所をもつことは、だいたいに於いて肯定されよう。

それはとにかくとして、もし生産経済的な観点からのみ考察するとすれば、企業結合の方向の如何によつてわれわれは縦断的ないし垂直的コンツェルン (Konzern mit vertikaler Gliederung) と横断的ないし水平的コンツェルン (Konzern mit horizontaler Gliederung) の二類型を指摘することができるであらう。縦断的(垂直的)コンツェルンとは前後相接続する生産行程の各段階における諸企業が集つて形成するコンツェルンを指す。そこでは原料の生産から最後の加工にいたるまでのあらゆる中間段階にわたつて原料・半製品・副生産物・關聯必需品・最終生産物を生産するそれぞれの企業がコンツェルンに結集されてゐるのである。例へば石炭—鐵鑛石—鉄—鋼材—壓延製品等の如し。

これに反して横断的(水平的)コンツェルンにあつては、生産行程の同じ段階における、あるひは同じ生産部門における諸企業が横に連結された場合であつて、例へば自動車製造業を営む諸企業の結合の如き、すなはちそれである。一應右の如くに區別することは可能であるが、純粹の横断的コンツェルンはむしろ少い。そして多くの場合、縦断的構成と横断的構成とは相結びつき、あるコンツェルンでは縦断的構成が優勢を保ち、他のコンツェルンでは横断的構成が優勢を示すといふのが實際において最も多く見られるところであるとおもふ。

五

以上において述べたところは、だいたいドイツの多くの學者の間に承認され、唱和されてゐるコンツェルン類理論の主要である。われわれは轉じてやゝ異色あるコンツェルン類型論に考察を進めようと思ふ。かゝるものとしてとりわけ注目に値するのはベッケラートである。彼は主著『近代工業主義』の中で經濟的見地よりするコンツェルンの類型を五つに分ち、それぞれの特徴を鮮かに拮き出してゐる。

- (一) 商人的指向のコンツェルン (Händlerisch orientierte Konzerne)
- (二) 資本經濟的指向のコンツェルン (Kapitalwirtschaftlich orientierte Konzerne)
- (三) ルーズな經營經濟的指向のコンツェルン (lockere betriebswirtschaftlich-orientierte Konzerne)
- (四) 經營經濟的指向の全體企業 (Die betriebswirtschaftlich orientierte Gesamtunternehmung)
- (五) 獨占的コンツェルン (Monopolistische Konzerne)

第一の商人的指向のコンツェルンといふのは、商業資本がコンツェルン形成の主體となつて形成したコンツェルンである。従つてコンツェルンの形成が主として商業的觀點からなされることはむしろ當然でなければならぬ。例へば強大な資本力を有する原料商人が、有利な投資先を見出すと同時に販路の確保を目的として株式を取得し、工業企業と結びつく場合の如き、すなはちそれだ。商業的ないし金融的な動機によつて形成されるのであるから、連結された工業企業の内部經濟にまで立入るだけの關心は少く、特に生産技術の點においては工業企業に對して、完全な自由と獨立とを許すことができる。それはルーズな結合であつて、極めて限られた間接的な工業經濟上の意義を有するにすぎない。かゝる場合に對しては、經營經濟的共同體 (betriebswirtschaftliche Gemeinschaft)

8) Beckerath, *ibid.* S. 331, ff.

であるとか、または傘下の企業間の経済的利益の統一化とかいふ現象は生じないが、しかしさうした方向にまで進展する可能性はもちろんありうるわけである。ドイツの史實の示すところによれば、戦後のインフレーション期において大きな商業利潤をあげた業者は、貨幣価値の下落から自己を守るために、工業方面に進出し、多くの『工業的商人コンツェルン』(industrielle Handelkonzerne)を形成した。例へばオットウ・ウォルフ(Otto Wolff)・ジッヘル(Sichel)・ブルーメンシュタイン(Rumenschein)・シモン(Geb. Simon)・カーン(Kahn u. A.)等々。

ちなみにいふ。日本においてもかうした型のコンツェルンが存在しないことはない。例へば伊藤忠コンツェルン、岩井コンツェルン等々。

次に資本経済的指向のコンツェルンと稱するものは、主として金融的動機から出發して形成されたコンツェルンである。この場合、イニシアティブを握るものは金融資本家であることはいふまでもない。それは單に企業結合の齎す株價の騰貴を狙つて行はれることもあるし、また純然たる投資物として株式を所有し、これを管理することもある。いづれにしても、この種の型のコンツェルンは生産合理的意義をもつものではない。

第三のルーズな經營經濟的指向のコンツェルンといふのは、部分的な利益のために企業の結合が行はれるが、他の點ではそれぞれの企業が獨立性を保つところのコンツェルンである。例へば特許權利用のために提携するか、共同で原料調達にあたるとか、共同の販賣機關を利用するとか、部分行程において共同生産を行ふとかいふ點で密接な經營經濟上の結合が成立するわけであるから、だいたいにおいて合理的な企業經營への前進を認めることができる。同時に、他方においては獨占的なコンツェルンのもつ不利、特に合同によつて個々の企業の經濟的獨立性を完全に喪失する場合の不利を免れる長所も考へられる。

第四の類型として掲げられるところの緊密な經營經濟的指向のコンツェルンといふのは、主として生産經濟的な、時としては販賣經濟的な目的のために成立するものであつて、多數の企業を連結してつくりあげた内部的に合理的なかつ緊密な組織をもつより大なる經濟的統一體である。それは競争關係に立つより小規模でかつ分散せる企業に比し絶對的な優越性をしめるとふ確信より出發する。換言すれば、大經營に固有の長所、とりわけ勞働の一般化、分業的に編成された機構的生產行程が一層よく實現される。若干の部門にあつては、經營の水平的および垂直的結合によつて原價節約的な技術的可能性の實現も見られる。さらには原料および製品のスツックの減少、經營における材料移動の迅速化、販賣組織の整備、輸送を考慮に入れた諸工場への注文割當、企業間の競争による廣告費の減少等もあげられる。

最後の獨占的コンツェルンとは今日一般に學術語として使用されてゐるトラストのことにほかならない。それはただに市場統制のみならず、内部的合理化をも實現することができる。換言すれば、價格の引上げと費用の低下と二つながら實現する可能性を有するところのものである。

以上の瞥見よりして、われわれはベッケラートのコンツェルン類型論の概貌を察知することができる。もし表現の簡素化を期し、われわれに都合のよい言葉をもつて置き換へるとすれば、それはコンツェルンをば獨占的なコンツェルンと非獨占的なコンツェルンとに分ち、後者をさらに商業型コンツェルン、金融型コンツェルン、工業型コンツェルンに分ち、最後に工業型コンツェルンをルーズな非有機的構造のコンツェルンと緊密な有機的構造のコンツェルンとに細分したものと云ふことができるであらう。コンツェルン形成の主體的性格とコンツェルンの構造そのものゝ分析を通して、コンツェルンの經濟的類型を浮彫にしようとしたところはすこぶる鮮かである。

り、われわれに多くの示唆を投げ與へるものと思はれる。けだしコンツェルンの類型的研究に觸れることなしに、ただコンツェルン一般について漫然たる論議を費すぐらゐる無意味なことはないからだ。

六

コンツェルンの類型を描いたものとして最後に注目すべきは、ハウスマンの所論であらう。ハウスマンは彼れの近著『經濟統制下におけるコンツェルンとカルテル』の中で、コンツェルンの類型を論じて次の三つをあげてゐる。⁹⁾

- (一) 客観化されたコンツェルン (Objektivierte Konzerne)
- (二) 個人的および家族的コンツェルン (Persönlichkeits- und Familien-Konzerne)
- (三) 公的および半公的コンツェルン (Öffentliche und halböffentliche Konzernbildungen)

第一の客観化されたコンツェルンとはいはば公開コンツェルンともいふべきものであつて、ハウスマンはこれをコンツェルンのあらゆる類型の中で最も重要視してゐる。ドイツにおける具體的な例證をあげれば、IG染料コンツェルンや合同製鋼株式会社 (Vereinigte Stahlwerke A. G.) 等がすなはちそれだ。最近における株式會社の發展が投資者としての株主からますます解放されようとする顯著なる趨勢を示してゐることは、なかんづくアメリカの學者によつて力説されきたつたところであるが、同じことはドイツに對してもいひえられるのであつて、かうした株式會社の動向はかゝる獨立の株式會社の結集であるコンツェルンに對しても影響を及ぼさざるをえず、客観化されたコンツェルンでふ類型を刻印づけるにいたつた。ここではコンツェルン傘下の諸企業における出資と經營とは著しく離隔しつゝあるばかりでなく、コンツェルンの主宰者によつてそれらの諸企業に對する多かれ少かれ權威的な指導が行はれるのである。それは最も本質的な意味において、近代的なコンツェルンの類型であ

9) F. Haussmann, Konzerne und Kartelle im Zeichen der „Wirtschaftslenkung“ 1938. S. 93 ff.

るといふことができる。

第二の類型である個人的乃至家族的なコンツェルンといふのは、構造においても指導においても特殊な人格または家族の利益の作用を伴ひ、まさにこの點に獨自の特徴が認められるものを指す。具體的な例證としてはフリック・コンツェルン (Flick-Konzern) やヘンケル・コンツェルン (Henkel-Konzern) 等をあげることができる。クルップ・コンツェルン (Krupp-Konzern) やジーメンス・コンツェルン (Siemens-Konzern) の構造もだいたいこの種の範疇に属するが、企業規模が擴大するにつれ、外部資本の導入が漸増の傾向をたどることは必然であつて、第一の類型に移行せんとする過渡期にあるといつてよい。換言すれば、第一の類型のコンツェルンと第二の類型のコンツェルンとの中間に位するいはば混合型のコンツェルンにほかならない。ここでは個人的なもしくは家族的乃至同族的な色彩が次第にうすらぎつゝある。否、久しい以前から個人的なインシアティヴがある程度脱落して、反對にコンツェルンの客觀化 (Objektivierung) がハッキリと現はれてゐることが看取される。

第三の類型として一括されてゐるのは、公的もしくは半公的な影響を有するコンツェルンである。この種のコンツェルンの典型的なものは合同工業株式会社 (Vereinigte Industrieunternehmen A.G.) であつて、一般にヒアード・コンツェルン (Vier-Konzern) の名で知られてゐるのがすなはちそれだ。このコンツェルンは私法人の形式をとつた國有企業を結集した特殊なコンツェルンであるから、いひうべくんば國策型のコンツェルンと稱しても不可ないであらう。結集された企業の範圍はアルミニウム製造、電力をはじめ諸産業部門にまたがり、雄大なスケールをもつた巨大コンツェルンである。『私的コンツェルン』 (Privatkonzern) とはおのづからその選を異にする。

ハウスマンの所論の骨子は、おほよそ以上の如きものである。コンツェルンの歴史的發展傾向と國家資本のコンツェルン化を據點として、類型的考察に注意を促した點は、いかにも彼らしい着想の警拔さを語るものであつ

て、われわれを啓發するところ尠くない。惜むらくは經濟の面よりする立入つた分析を缺いてゐるやうにも思はれるが、法律學者に對してさうした要求を持ち出すことは適當を缺くであらう。われわれはそこに彼れの仕事の限界を見出すよりも、經濟學徒の今後掘り下ぐべき新しい耕地を見出したいとおもふ。

七

上來わたくしはドイツの學者たちの所説に依據しつゝ、コンツェルンの類型に關するさゝやかな考察を試みてみた。讀つてわが學界におけるコンツェルンの類型的研究はどうであらうか。少くもこれまでのところ決して多産的であつたといふことはできない。われわれはすでに、産業資本型コンツェルンと金融資本型コンツェルンとの區別に關するわが國の學者の所論について一言した。が、それはひつきやうするに抽象的な一般論の範疇を脱せず、必ずしも特にわが國のコンツェルン運動に即して具體的に展開されたものではない。われわれにとつての問題はより具體的な、より現實的な角度からの分析である。またあらねばならぬ。この要求に對し一即刻應じうるものは、むしろチャーナリストの所論であらう。それによると、わが國のコンツェルンは既成コンツェルンと新興コンツェルンの二つの類型に大別しえられるといふのが、ほぼ今日の定説となつてゐるらしい。¹⁰⁾

既成といひ新興といふ。要するにそれは時間の觀念を離れて解することのできないこと明白であつて、だいたい滿洲事變を境界として、それ以前すでにコンツェルンとして確乎たる地盤を築き上げた諸財閥と滿洲事變以後時局の進展に呼應して急激に擡頭してきたた化學工業・重工業等における新興のコンツェルンを指す。より具體的にいへば、三井・三菱・住友・淺野・古河・安田等は前者に屬し、舊日産(瀧業)・日窒・日曹・森(昭和電工)・理研等は後者に屬する。これは何人もよく知つてゐる一般の常識だといつてよい。

が、この二つのグループは決して單なる時間的觀點からの區別にはとどまらぬのであつて、それはより多方面

10) 高橋龜吉、青山一郎『日本財閥論』昭和十三年、三宅晴輝『新興コンツェルン』昭和十三年。

からの考察によつてあくまで經濟的な類型として把握されてゐることは、特に斷るまでもあるまい。この點に深入りすることは紙幅の許さざるところであるけれども、いはゆる既成コンツェルンが多分に同族の色彩をもち、また封鎖的であるに反し、新興コンツェルンがさうした色彩に乏しく、また著しく開放的である點において、前者はハウスマンの提唱する『家族的コンツェルン』に近く、後者は『客觀化されたコンツェルン』に近いといへよう。ところでこの際問題としたいのは、わが國のコンツェルンは既成と新興の二つの類型によつて果してあますところなく説明しえられるかどうかといふことである。いまわたくしを見るかぎりでは、遺憾ながら不充分であると答へざるをえない。例へば三井・三菱・住友の如き巨大財閥は既成コンツェルンの粹々たるものであるが、金融型とか産業型とか名づけるにはあまりに尨大であり、多面的であつて、むしろこれを綜合型コンツェルンとして一括し、爾餘の既成コンツェルンと別格に取扱ふことを妥當とするやうにおもはれる。

また既成コンツェルンと新興コンツェルンを分つ標識として、ひとはしばしば銀行・保險・信託等の金融資本を傘下に包容するか否かを問題とするけれども、既成コンツェルンに屬しながら、淺野や大倉の如く殆んど金融資本を缺いてゐるものも存在するのである。従つて仔細に點檢するならば、既成コンツェルンの陣營中からも商業型、産業型、金融型等の類別を抽出する必要を感じずには居られないであらう。

最後にわたくしはハウスマンの『公的または半公的コンツェルン』に照應するものとして、國策型とも名づくべきコンツェルンの存在することに注意を喚起しておきたい。それはドイツのヒアッグのやうに國有企業よりなるコンツェルンではないが、半官半民的ないはゆる國策會社の一團であるといふ點において一種の特殊性をもつからだ。かゝるものとして、われわれは滿洲重工業・北支開發・中支振興等一聯の諸コンツェルンをあげることが出来るであらう。(一八・一一・二〇)